

アーロン収容所

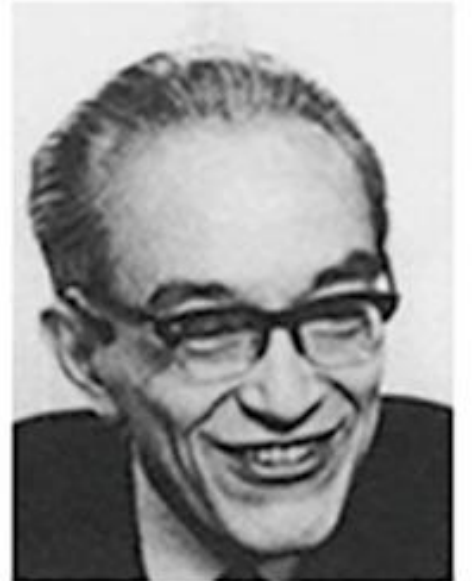
西欧ヒューマニズムの限界

著:会田雄次(中公文庫・1962年)

150781136 垣見光佑

人物 会田雄次とは

- A) 1943年にビルマ戦線に出兵
- B) 「安」師団 第二百二十八連隊第二大隊第五中隊に配属
- C) 当時病弱で病身
→しかし「第一選抜」に選出
- D) 1947年までイギリス軍捕虜でラングーンに拘留



ビルマ戦線



A) 昭和19年3月初期ビルマ戦況急変

ア) 当時著者の部隊はビルマへ緊急輸送

B) 師団主力はシャン地方に降下

→敵空挺部隊を攻撃し成功

ア) しかし追撃戦で壊滅的な損害

→戦力減少

ビルマ戦線

- C) 「安」師団は軽機のみで敵戦車と第一線で衝突
- D) メークテーラの戦いで敵戦車集団に敗北
 - ア) 「安」師団は2万人から3千人に減少
 - イ) 歩兵は全滅に近く3百名以上いた中隊は14名に減少

捕虜生活へ

A) 虚偽：全面降伏 真実：無条件降伏

ア) 武装解除後、強制労働開始

B) ペグー北方の山脈地帯にある捕虜収容所に到達

C) 風説「激戦地で犠牲の多い部隊ほど早く返す」

→移動命令で皆喜、船に乗船

D) 目前にはラングーン・イラクジ

ア) ここが「ビルマ・ラングーン地区アーロン日本降伏軍人収容所」

アーロン収容所の捕虜生活 I

- A) 敗戦し捕虜生活、日本軍が捕虜を扱うと同様に残忍に扱われると考察
 - ア) イギリス軍の暴力は皆無
 - a) 絶対的に優位
 - 暴力などの残忍な行動は不必要
- B) 捕虜には最低限の食料を供給し最大限の労働を指示
- C) 収容所の掃除や、入り口の前に草花を植林、後片付けや便所作成

アーロン収容所の捕虜生活Ⅱ

- D) 敵軍は捕虜が便所の掃除中用を足すなど極度の軽蔑と復讐を示す
- E) 敵軍から米供給泥と砂が3割混在
 - 泥と砂が3割混在
- F) 敵軍は捕虜を家畜と判断
 - 彼らは「他者」は無く自分ら以外は家畜と軽蔑視

帰還 I

- A) 2年間の捕虜生活終了後昭和22年5月に帰郷
 - ア) 小隊長が激的な運動で帰りの船に乗船
- B) 5千~6千も捕虜をラングーンへ残し帰郷
 - ア) アーロン収容所刺激臭、蠅が大量発生
 - イ) 食料の支給がなし持参米を食す
 - 1,2匹の蠅とともに
 - a)不衛生
 - b)顔面蒼白
 - c)衣類不潔

帰還Ⅱ

- A) 監視は緩慢
- B) ラングーン捕虜帰郷見通し無し
 - 気持ち凋落
- C) 帰還時、看護婦が神であると錯覚
 - 白色肌と綺麗な身体に驚愕
 - ア) ビルマ女性腰回り男同様華奢
 - イ) 色黒で魅力は皆無
- D) 日本人女性気力旺盛
 - 日本国安泰と安堵